



しん しゅう じ どう せい てん
真宗児童聖典



ひがしほん がん じ
東本願寺

君たちへ

君は明日どのようなことに会おうのだろうか

君はどんな友達と会おうのだろうか

君はつらく悲しいことにも会おうかもしれない

立ちはだかるカベがあれば、懸命に挑戦するのもいい

つらければ泣けばいい

つらいなみだは、君のこころを浄化し、温めてくれるだろう

悲しみは、君をやさしくしてくれるだろう

出口のないトンネルで迷子になるかもしれない

ときには、損をし、傷つくこともあるかもしれない

負けて傷つく君が素敵なときもある

いつか、星と星が線で結ばれ星座になるかもしれない

すべてのことが、いつの日か「無駄ではなかった」といえたらいい

ほんの少しの勇気を小さなポケットに入れて行こうじゃないか

君には「こころのふるさと」があるじゃないか

「目には見えない世界」を大切にしてほしい

そして『真宗児童聖典』と共に歩んでほしい

—本書について—

本書は、一九二四年から一九二六年にかけて、大谷派本願寺（真宗大谷派）社会課機関誌『児童と宗教』に連載された「真宗児童聖典私考」を基に書籍化したものです。「真宗児童聖典私考」は、仏教学者の大河内了悟氏（おほこうちりょうご）が編著者となり、『仏説無量寿経』、『仏説観無量寿経』、『仏説阿弥陀経』、『正信偈』のころを当時の子どもたちに伝えようと語りなおしたものです。連載から約百年が経つ今、大河内氏の願いを引き継ぎ、現代の子どもたちに伝わるよう、あらためて言葉を吟味し、出版いたします。「真宗児童聖典私考」によっているため、本書には、原典にはない表現も見られます。本書をとおして、原典にこめられた「ねがい」にふれていただければ幸いです。

真宗児童聖典
目次

仏説無量寿経

1

仏説観無量寿経

105

仏説阿弥陀経

173

正信偈

189





ぶっせつむりょうじゆきょう
仏説無量寿經



おも
とうじょうじんぶつ
主な登場人物

ぶつせつむりょうじゅきょう
『仏説無量寿経』 編 へん

○お釈迦さま……真理に目覚めた人。釈迦族の王子として生まれる。苦しみ悩むすべての人に真実（仏教）の教えを説く。

○阿難……お釈迦さまの弟子であり、いとこ。いつもお釈迦さまの身の回りのお世話をしながら、お釈迦さまの話を一番よく聞いた。『無量寿経』での物語は、阿難の問いに対して語りはじめられる。

◇法蔵菩薩……お釈迦さまが話された物語に登場する菩薩さま。一国の王さまだったが、世自在王如来のお話を聞いて感動し、誰もが救われる国をつくりたいと願う。

◇世自在王如来……「世を自在に生きる王」という意味の名のほとけさま。法蔵菩薩にさまざま
まなほとけの国を見せる。

◇阿弥陀さま……法蔵菩薩が願いを達成し、ほとけさまとなったときの名。すべての人を救

◇ 弥勒菩薩……

いたいと願ねがい、48の本願ほんがんをたて、浄土じょうどという国くにをつくる。
56億7千万おくせんまんねんご年後ごに、ほとけさまになることが決きまっている菩薩ぼさつさま。『無む

量寿経』での物語ものがたりは、弥勒菩薩みろくぼさつに対たいしても話はなされている。

※ ○は、実在じつざいの人物じんぶつ。◇は、お釈迦しやかさまのお話はなしに登場とうじょうするほとけさまや菩薩ぼさつさま。

『仏説無量寿経』

ある時、お釈迦さまがインドの耆闍崛山という山に、一万二千人もの大勢の弟子たちといっしょにられました。弟子たちは、お釈迦さまと同じように尊敬される人ばかりです。

その日、お釈迦さまのにこやかな顔とすがたは、かがやいていました。

弟子の一人阿難は、お釈迦さまのすがたが、いつもとちがうことに気がつきました。そして、手を合わせてこう言いました。

「お釈迦さま、今日のお顔とおすがたは、とてもかがやいていますね。わたしは、初めて見ます。きっと、あたたかくやさしいほとけさまの

おこころを、思おもわれているのでしよう。どうぞ、その理わけ由をお聞きかせ
ください」

そこで、お釈しゃ迦かさまは、そつと口くちを開ひらいて、次つぎのように話はなしはじめ
ました。



ほとけさまは、とてもやさしい方かたです。そのお名前なまえを阿弥陀あみだ仏ぶつとい
って、世よの中なかに苦くるしみ迷まよっている人ひとたちを、休やすむことなくどんな時ときも
愛情あいじょうぶか深く見みまもってくださいます。わたしがこの世よに生うまれてき
たのは、いかりや悲かなしみに苦くるしむ人ひとたちに、阿弥陀あみださまのおこころを
伝つたえたいと思おもったからです。

阿弥陀あみださまの教おしえを聞きけるのは、とてもめずらしいことです。例たとえ
るなら、数すうまんねん万年いちどに一度いちどしかさかない優曇華うどんげの花はなを見みるのと同おなじくらしい
めずらしいことです。この花はなをもし見みられたなら、こころが晴はれてゆ
かいになると言いわれています。阿弥陀あみださまの教おしえを聞きくのは、そのよ
うにめったとなく、幸しあわせなことなのです。

阿難あなんよ、あなたは今いま、ほとけさまのお話はなしを聞ききたいと、わたしにた
ずねましたね。とても幸しあわせなことですよ。

阿難よ、阿弥陀さまは、たくさんの智慧をお持ちで、どんなことでも知っています。とてもやさしい方で、いかり、迷い、苦しむすべての人たちを救ってくださいます。そして、わずかひとにぎりのご飯で、いつまでも寿命をつなぎます。そのおすがたは少しも変わることなく、いつも、にこやかな笑顔をたやされません。

阿難よ、わたしはこれからあなたに、阿弥陀さまの物語をお話ししましょう。

それはそれは遠いむかし、錠光如来というほとけさまがこの世にあらわれて、たくさんの人たちを救いました。錠光如来がお帰りになると、次に光遠如来というほとけさまが、この世にあらわれました。その次に月光如来、その次に梅檀香如来と、五十三ものほとけさまがか

わかるがわる、この世にあらわれました。

五十四番目にあらわれたほとけさまが、世自在王如来でした。その時、ひとりの王さまが、世自在王如来の教えを聞き、たいへんよろこび感動しました。自分もほとけさまのようにさとりを開きたいと願いました。王さまは、国や位のすべてをすて、ひたすら修行に励みました。王さまは、法蔵と名のり、智慧も行いも、こころも、すがたも、この世の中のだれよりも超えてすぐれていました。

法蔵菩薩は、世自在王如来の前にひざまずき、手を合わせて、ほとけさまを讃えながら、みずからのかたい決意を歌いました。

みほとけさまの　そのお顔
世に超えすぐれ　類なく